

平成 29 年度 エネルギー・環境教育プログラム開発

三重大学教育学部附属中学校 教諭 中垣 尚子

1. 研究テーマ

『共に生きる』～多文化共生社会の視点から防災学習を考える～

2. 対象 三重大学教育学部附属中学校 全校生徒

3. 教科 総合的な学習の時間

4. 目的

近年おこった大規模災害では、想像をはるかに超える被害がもたらされた。その際、避難所で一番活躍したのが中学生・高校生だという。三重大学教育学部附属中学校は附属学校園の避難所になっており、その役割も大きいと考えられる。附属学校園の避難所とはいっても、実際に災害が起きれば、附属学校園の方以外の多くの方も附属中学校に避難されることが考えられる。

地域の方の中には外国人の方も含まれるだろう。グローバル化が進展している現在、日本にも多くの外国人住民の方々がいる。三重県での外国人在住比率は高く、全国で第3位、第4位という状況である。この三重県でひとたび大規模災害が起きれば、被災者の中には当たり前のように外国人や外国につながる人がいる。外国人が災害時に抱える不安や悩みを知り、自然災害への『備え』につなげていきたいと考えた。

また、『誰にとっても使いやすい避難所』を作るために、地域に暮らす人たちのことを知り、そのために必要なことを考え、備えておくことができれば、地域の人にとっての安心につながる。

『誰にとっても使いやすい避難所づくり』を通して、防災と多文化共生についてのよりよい地域社会を考える機会にしたい。

5. 授業計画

(1) 実施日と内容：① 平成 29 年 6 月 27 日 (火) 14:40～15:30 講演会 (全校 1 時間)

② 平成 29 年 7 月 10 日 (月) ワークショップ (各学年 2 時間)

1～2 限	3 年生
3～4 限	2 年生
5～6 限	1 年生

6. 授業実践

①【講演】

公益財団法人三重県国際交流財団 (MIEF) より筒井 美幸さんに来ていただき、『共に生きる』～災害時の外国人支援から考える～という演題で講演をしていただいた。

概要：一昨年の 4 月に起きた「熊本地震」の時の筒井さんの活動の実体験をもとに、生徒と一緒に「みんなが安心して過ごせる避難所」について考える機会になるように話していただいた。

その際、筒井さんが協力をされた「災害時多言語支援センター」の活動や被災地の様子や三重県は外国人住民の比率が高く、三重県でひとたび大規模災害が起きれば、被災者の中には当たり前のように外国人や外国につながる人がいるという状況を伝え、7月10日のワークショップで学ぶ『備え』につなげるようにした。

講演の内容：

1. 熊本地震について確認する

2. 熊本地震での外国人支援 『熊本地震災害多言語支援センター』

(1) 外国人被災者に「安心」と「安全」を届けることを目的として実施

(2) 全国の国際交流協会や外国人支援をしている人の協力（ネットワーク）

※阪神淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災など、過去の大震災の経験からわかっていたことを熊本地震に生かすことができたことも多い。

(3) なぜ外国人支援をしたのか

① 外国には地震のない地域もあるため、地震の経験がない人はパニックになってしまうこと。

② 外国人特有の課題があること。（在留資格、パスポートなど。）

③ 日本の制度を知らないから、教えてあげないとわからないこと。

④ 外国人にも支援者になってほしいこと。

3. 災害に備えて考えておきたいこと

目指すべき姿 → そのために何が必要か → 誰がするのか？どこが窓口となるのか？ → 普段からやっておかなければいけないことは何か

4. まとめ

(1) 災害が起きると、多くのことを地域の人たちで実施することになる。でも、普段できないことは、災害時にもできない。普段からできることを増やしておくことが必要。災害は、日常の生活の延長線上にあるということ。

(2) 外国人は、災害時要援護者といわれているが、高齢化が進む中、地域で助け合いができないと、助かる命も助からない。外国人にも支援者になってもらう必要がある。そのために、普段からどのようなことをしておくか考えて実践してほしいというメッセージを伝える。災害時に協力してくれる人を増やすためには、普段からのつながりが大切であること。

(3) 国籍による差別はしない。どの国の人の命も、命は大切な命である。津市に暮らすすべての人が、三重大学附属中学校の避難所を利用するすべての人が、災害時にも安心できるよう、必要となる支援のネットワーク作りと、被災者一人ひとりに対する柔軟な対応が求められていること。

講演の中では、支援をするためには自分や自分の家族の命を守る必要があるため、非常食や非常持ち出し袋などの用意をすること、避難所運営は地域の人全員ですること、東日本大震災では中高生が活躍して避難所が明るくなったということも伝えていただいた。

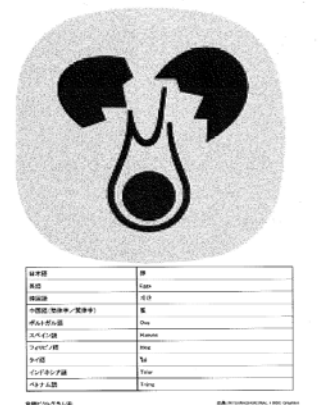


②【ワークショップ】

①の講演に引き続き、公益財団法人三重県国際交流財団（MIEF）より筒井 美幸さんに来ていただき、『誰もが安心して過ごせる避難所にするために』というテーマでワークショップをしていただいた。

概要：避難所情報伝達キット「つたわるキット」（写真参照）を紹介する。その後、各グループで、“誰もが安心して過ごせる避難所環境を整えるには、日ごろからどのような準備が必要か”を考える。最後に、各グループで考えたことを発表し、考えたことを全体で共有する。

人数：1班4人×9班×1学年4クラス＝144人



※避難所情報伝達キット「つたわるキット」

ワークショップの内容：

【1限目】

1. 本日のワークショップの説明
2. 6月27日の講演内容のふり返り

3. 避難所情報伝達キット「つたわるキット」の紹介（つたわるキットを作った経緯、期待する効果など）

4. グループワーク開始

(1) 各班（4人）で「誰もが安心して過ごせる避難所にするには、日ごろからどんな準備をする必要があるのか」考える。

- ① 各班に配布されている付箋に、各自が考えることを一つずつ書き出す。
- ② 各自が考えたことを班内で共有する。
- ③ 模造紙に貼った付箋をグループ分けする。
- ④ グループ分けができれば、各テーマについて意見を出し合う（意見を深める）

※話し合う時、会場内にある「つたわるキット」を見に行ってもよい。

【2限目】

⑤ 班の意見をまとめる。（発表の準備）

(2) 各班で話し合ったことを発表する。

(3) まとめ

- ・「知らないことがたくさんある」ことに気づいてほしい。
- ・知らないことを知ることから準備を始めてほしい。
- ・今日考えたことを、各自実践してほしい。

(4) 質疑



7. 課題と成果

最近では地震に対する関心が生徒にも増しており、真剣に取り組む姿が多く見られた。

今回は環境教育としての自然災害（地震）の防災の視点から考えるとともに、国際理解としての視点も取り入れ、『共に生きる』～多文化共生社会の視点から防災学習を考える～というテーマで授業を考えた。

自分が避難するだけの避難訓練は今までに何回も行ってきたと思うが、避難した後の避難所生活のことまで実際にイメージして考える訓練はしてきていなかった。実際に本校の体育館が避難所になるということで、実際の場面をより明確にイメージ

して学習することができていた。ホストとして受け入れる立場で考えることは今までになく、様々な条件の人が集まる集団で必要なものや困ったことがそれぞれ違うこと、考慮しなければならぬことがそれぞれ違うことなど、想像力を働かせながら頭をフル回転させて考えていた。そのため避難後の生活や避難所での集団生活を考えるいい機会になった。

また、学校が避難所になったことを想定することで、地域との結びつきや外国籍の方々を含む様々な人々とのコミュニケーションについても幅広く考えることができた。

講師の方に実際の熊本地震での活動の話聞くことによって、より深い学びや気づきがあった。2回講座で行ったので、知識を得るだけでなく、その学んだ知識をもとに次の回では「自分で考える」というステップで授業を組めたのは効果があった。ワークショップの発表会では、教員の予想を超えるようなアイデアがあり、気の利いた配慮やサポートの意見がたくさん出てきて驚かされた。生徒の優しさや思いやりが感じられ、頼もしく感じられた。

しかし、自分で考えるところまでの授業であったので、次のステップである「行動する」までにはいけなかった。「行動しよう」と思うには1回や2回の授業ではなく、継続した取り組みが必要である。

この学習を通して、地震という自然災害に対応するために、地域としてのつながりの環境を整えることも災害対策になるということを感じられたのではないかと思う。外国籍の多い愛知県では、外国籍の人々向けに「避難所の使い方」や「避難所とは？」というレクチャーや訓練が実施されているという。三重県でも、これから何が必要かを考え、地域とともに取り組んでいけるといいと思う。挨拶一つからのスモールステップでも、できるところから始めてみようと思えるきっかけづくりを多文化共生の視点から日々の授業の中に取り入れていくようにしたい。

2学期に本校の吉岡教諭が行っていた避難所経営の授業では、生徒の感想に外国籍の方を配慮するコメントもあり、学習が生かされていることが実感できた。今後とも、引き続き取り組んでいきたいと思う。